第 6 回

日本人初の冬季五輪メダル

猪谷千春

igaya chiharu

Copyright © 2012 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

日本人初の冬季五輪メダル　猪谷 千春

冬季オリンピック初の日本人メダリストが猪谷千春さんである。1956年のコルチナダンペッツォ大会男子回転で銀メダルを獲得した。それは、非ヨーロッパ系選手として初のメダルでもあった。黒いウエアに身を包んだ猪谷さんは、猫のような素早い身のこなしで観衆の度肝を抜き、「ブラックキャット」と称された。それ以降、スキージャンプ、スピードスケート、フィギュアスケートなど、冬季大会において多くの日本人メダリストは生まれたが、スキーアルペンでのメダリストは、猪谷さん以降、まだ誕生していない。

ビジネスマンに転じた猪谷さんは、1982年からIOC（国際オリンピック委員会）委員としても活躍。そんな猪谷さんに、スキー人生、オリンピック・ムーブメント、キャリア・プランニングなどについてお話を伺った。

聞き手／西田善夫　文／山本尚子　構成・写真／フォート・キシモト

千島列島の国後島で生まれる

4歳の頃（1935年）

── 猪谷さんのお生まれは、北方領土の国後島だそうですね。

そうです。千島列島の国後で春に生まれたので、「千春」という名前になりました。この名前のことで、よく親父に文句を言ったものです。

── ほう、なぜですか。

親父の名前は、「六合雄」と書いて「くにお」と読みます。由来は、親父の祖父が漢文の先生か何かで、東西南北と天地を統合できるような大きな人間になれ、という願いを込めて名付けられたということでした。それに比べて、私の名前は単純でしょう？

── お父様はアナウンサー泣かせのお名前でしたね。なかなか「くにお」とは読めません。でも千春さんも、ロマンチックないいお名前ですよ。

雪を求めてスキーの英才教育

── 猪谷さんは、スキー選手として特別な道を歩いて成長された方だと思います。英才教育を受けたということでよろしいでしょうか。

人はそう言いますね。こちらとしては、とんだ迷惑だったのですけれども。というのは、うちの両親は日本のスキー界の草分け的存在だったものですから、好むと好まざるとにかかわらず、私は2歳でスキーを履かされたわけです。当時の日本では、まずそんな例はなかったでしょう。千島の後は、箕輪（群馬・赤城山の麓）の分教場に1年、長野の乗鞍の麓に6年生のはじめまでいて、その後、青森県の浅虫で小学校を卒業しました。

乗鞍の小屋の前にある一本杉（1940年）

── それは雪を求めての転校ですか。

そうです。

── お父様は勉強にも厳しかったそうですね。

はい、一人前の人間になるには、スキーだけではなく、勉強もやらなくてはならないと。勉強したことはのちのち役立っていますよ。スポーツでも技を磨くだけでは勝てる選手にはなれません。技術を使いこなす頭脳を持ってこそ、強い選手になれるのです。

スター氏との出会い

── 1952年、オスロ冬季オリンピックの代表になられました。日本が戦後初めて参加したオリンピックは、ヘルシンキの夏季大会と思われがちですが、実際はオスロの冬季大会ですよね。猪谷さんには、なんでもその直前、運命的な一つの出会いがあったとか。

東京都立大泉高校3年生のときでした。当時、田島一男さん（元フェニックス会長）のお宅に下宿していたのですが、51年12月のはじめ、期末試験に備えて参考書を買いに銀座に出たんです。ついでに、田島さんが支配人をしているスポーツショップにも立ち寄ったら、田島支配人と外国人客が何か言い争いをしている。「スキー板の弾力を試しているうちに、滑走面のプラスチックがはがれてしまったので弁償したい」「それぐらいのことで壊れたのは日本製品の恥だから弁償はいらない」。そこへちょうど私が入っていったら、田島さんが渡りに船とばかりに私をその外国人に紹介してくれたのです。

── それが米国のAIU保険会社のコーネリアス・バンダー・スター社長だったのですね。

ええ、田島さんは「彼は来年1月のオスロオリンピック日本代表だ」と私を紹介してくれましてね。するとスター氏は「ヨーロッパの選手はすでに雪山で練習しているというのに、おまえは雪のない東京で何をしているんだ?」と。そしてそこから話が進展して、「自分とワイフが猪谷を個人的に招待しよう。明日の飛行機でヨーロッパへ行け」ということになりました。

── 明日、ですか?

冗談だと思いました。すると通訳が「この方は、財政的な問題で才能を活かせないでいる世界中の若者を援助することに尽力している人だ。猪谷さんがこの申し出を受けなければ、別のだれかが招待されることになる」と言いました。当時はパスポートを取得するだけで1カ月かかる時代。しかしいろいろ手を尽くして、私と一緒にオスロの代表に選ばれていた水上久選手と二人、10日後にはオーストリアのサンアントンに渡っていました。

── 早かったですね、それは。

1952年オスロ冬季オリンピックで堂々の11位

恩人スター氏（右）と志賀高原のコースを見る

オスロ大会回転で11位の結果を収める（1952年）

オーストリアで練習を始めてみて、現地のスキー用具の性能の違いに驚きました。私たちのスキーは単材の板でしたが、あちらのスキーは合板で、それもスターさんの厚意で購入してもらいました。

── オスロ大会の日本代表選手団は何人ぐらいでしたか。

監督、コーチを入れ12～13人ぐらいだったと思います。私の成績は、回転では1回目に旗門にスキーを引っかけてタイムロスがあったのですが、それでも11位でした。

── 初めての国際舞台で、素晴らしい成績でしたね。

人まねではなく人より一歩ずつ先んじる

一つ発見がありましてね、第二次大戦直後の日本にはヨーロッパとのコミュニケーションシステムがないため、欧州のスキー技術についての情報は伝わっていなかったのです。私が親父と一緒に考え出した技術は、日本の主流とは全く違ったものでした。しかしヨーロッパに行ってみると、まさに合致していたのです。

── どう違っていたのですか。

体重の乗せ具合ですね。日本の主流は、例えば左に曲がるときに上体を左側にねじり体重を左足に乗せて回転するというものでした。でもこれだと、スキーのテール(後部)がずれてタイムロスにつながるのです。そこでずれのないようにと私たちが考えた技術は、上体は右へ残し、体重も右足に乗せながら左に曲がる。つまり真反対なのです。ヨーロッパではみな私たちと同じ滑り方だったので、向こうの選手と互角に戦えたわけですね。

── なるほど。

人まねでは、ライバルに追いつくことも、ましてや追い越すこともできないのですよ。例えば跳馬の山下跳びなど体操のウルトラC、バレーボールの回転レシーブ。日本人はこれらを開発したことで世界のトップに立った。でも体力のある外国の選手がそれらを身につけると、たちまち抜かれてしまう。だからこそ我々は、常に一歩ずつ先んじていく必要があるのです。これはスポーツだけでなく、政治でもビジネスの世界でも同様です。そうしていかないと、勝利につながりません。

ダートマス大学へ留学

渡米の際に見送りを受ける(1954年)

オスロのオリンピックが終わってから、スター氏に全米アルペン競技選手権に招待されました。水上選手と二人で彼の経営するアメリカのスキー場で練習をし、私は2位になりました。それから、ハワイで1週間の休養をもらって帰国しました。オリンピック参加のための渡欧前、私は立教大学に合格していたので、帰国してすぐ入学しました。その秋、スター氏が日本のAIUに立ち寄ったというので挨拶に行きましたら、「アメリカで勉強しながらスキーをしてみないか」と誘われました。私としては、アメリカの雰囲気やスキー場の様子はわかっていますから、是非行きたいと思い、スター氏の厚意を受けることにしました。

ダートマス大学の卒業式に臨む母・サダ(左)等と

── 猪谷さんにとってオスロ大会は、のちに続く人生の道ができたオリンピックといえますね。スターさんとの出会いが、猪谷さんの環境を変えたのですね。

環境も変わったし、人生も変わったし、すべて変わりましたね。

1956年コルチナダンペッツォ大会男子回転で銀メダル

コルチナダンペッツォ大会回転のスタート風景（1956年）

── コルチナダンペッツォのオリンピックに出場されたときは、ダートマス大学の学生だったのですね。

はい、3年生でした。

── あの大会から、NHKは冬季オリンピックのラジオ中継を始めたのです。

ああ、そうでしたね。当時は、海外からは短波放送しかなかったので聞きにくかったのですよね。

── 猪谷さんがコースの下方へ潜るように滑っていくとき、岡田実アナウンサーが、「猪谷、いったん鞍部に消えました」と実況したのです。自分の視界から見えなくなったときにそう言って、しばらく沈黙し、姿を現したときに「見えました」と。私はちょうどアナウンサーになることを考えていたときだったので、表現の大胆さを感じましたね。そのこともあって、猪谷さんの銀メダルは非常に印象に残っているのですが、旗門通過でクレームがついてずいぶん時間がかかったそうですね。

4～5時間は待たされたのではないでしょうか。1回目に6位だった私は、2回目、6番目の旗門を倒しながらギリギリで通過しました。完全通過ではなかったと言われても仕方ないぐらいの際どい状況でした。当時、片スキーが旗門の外へ出ていたら、それは不通過ではなく、ペナルティーで5秒加算となります。そうすると私が4位に落ち、3位のスウェーデンが2位に、4位のアメリカが3位に繰り上がれることから、クレームがつきました。しかし、当時はビデオなんてありません。ありがたかったのは、イタリア人の旗門員が「猪谷は完全通過している」と断固主張してくれたことでした。その主張を受け、私の銀メダルが決まりました。旗門はスキーの先から靴までが通過して初めて「完全通過」と見なされますが、私のケースが原因で、その後、両スキーが完全に通過していなければ不通過というふうにルールが改正されました。

アルペン三冠王に輝いたトニー・ザイラー（1956年）

── そのときの優勝はトニー・ザイラー。滑降、大回転も制し三冠王になりましたね。

幸運をつかめる人と そうでない人の差は

── こうして猪谷さんのものの考え方を伺っていると、今いる環境の中にあって自分をどう活かすかという視点でずっと行動されていたことがよくわかります。また行動が積極的で早いのですね。

おっしゃるとおりです。私はいま、若い人によく言うのですよ。「幸運と不運というのは、だれの周りにも空気と同じようにある。その中でだれが幸福をつかみ、だれが不幸をつかんでしまうのか、それは本人の努力次第だ。日頃から努力して、一生懸命勉強や仕事をしていれば、たまたま訪れた幸運をしっかりつかむことができる」と。その意味で私は、自分で言うのも何ですが、努力もし、勉強もして、貪欲にチャンスをつかんできました。

ビジネス一筋、46歳で社長に

AIU 保険社長時代

── 4年後、1960年のスコーバレー大会にも出場されました。

ダートマス大学を卒業した私は、59年に AIU に入社してサラリーマンになりました。そのときに、スキーの競技会からは足を洗ったつもりでしたが、翌年のスコーバレー大会に周りから出場しろとそそのかされまして……。

── 結果は、回転で 12位でしたか。

そのくらいでしたね。まだ金メダルを取っていませんでしたから、ねらってみようと思って、いちかばちかのレースをしたのですよ。私は、「オリンピック」の存在を知ったときに、三つの目標を立てました。一つ目が「全日本のチャンピオンになること」。二つ目が「オリンピック選手になること」。三つ目が「メダリストになること」でした。

── 順調にクリアされていったのですね。IOC 委員に就任されるのは 82年ですが、ではそれまではビジネス一筋だったのでしょうか。

ビジネスマンとしての私の目標は、「45歳になったらばどんな会社でもいいから社長になる」ということでした。そこで完全にビジネスに専念し、46歳で新会社の社長を任されたのです。

IOC委員となり再び スポーツの世界へ

それが 50歳で、また大きなチャンスをいただくことになったのですね。当時は、今年7月に IOC 委員に就任した竹田恒和 JOC（日本オリンピック委員会）会長のお父上の竹田恒徳さんが IOC 委員を務めていらしたのです。以前から存じ上げてはいたのですが、その竹田さんが「IOC 委員を退任するので、ぜひ自分の後継者になってほしい」と。まさに天から降って湧いたようなお話でした。でも当時は社長として充実もし一番忙しいときでしたから、「大変光栄ですがお断りするしかないと思う」と答えました。

── そういう経緯があったのですね。

それでも竹田さんは、二度、三度と私の事務所に来られる。最後にはとうとう「1年に1週間だけ、IOC 総会のために割いてくれればいいから」とおっしゃって。これほど一生懸命誘ってくださっているのだし、それならばということでお引き受けした次第です。

── 本当に1年に1週間でよかったのですか。

メキシコ IOC 総会後の竹田恒徳 IOC 委員（左）
中央は東龍太郎 IOC 委員。(1968 年)

アンゲロプロス・アテネ大会組織委会長（右から2人目）
等と（2004 年）

いや、1年目こそ1週間しか行きませんでしたが、次第にそれが1カ月になり、2カ月になり、とうとう私としても決断しなければならないときが来ました。いろいろ悩みましたが、2歳のときからスポーツの世界にいたのだからと、会社に辞表を出しました。

── 会社は何と？

「理由は何だ？」と聞かれたので、「仕事と IOC、とても両立はできないのでスポーツを選ぶ」と答えました。すると「じゃあ、会社を替えればいいだろう」と、それほど忙しくない別会社の社長に異動させてくれました。アメリカの会社なのでそういうことができるのでしょうね。

── 将来性のある者を長い目で見て育てていく。そういうところにお金をかけるという視点は、日本の企業にはまだ足りない部分かもしれませんね。

ハードワークな IOC委員

ソウルで開催された IOC 総会で演壇に立つ（1992 年）

── 猪谷さんのことですから、IOC 委員の活動に本腰を入れると腹を決めたら、また目標を設定したのでしょう？

そのとおりです。まず、なんらかの委員会に抜擢されること。それから、委員長になること。理事になること。さらに副会長になることを自分に課しました。会長については年齢的な問題もありましたし、ともかく段階を踏んでいこうと考えました。

── それもまた全部、実現されましたね。理事は2期務められ、2005年7月には副会長に就任されました。2011年に定年で退任されましたが、30年間も務められて大変なのはどんなことでしたか。

一番大変なのは、会議が頻繁にあることですね。多いときは年間 20回ほど海外出張をしました。仕事もありますから、半日や1日の会議に出席するときは、1泊3日で行くこともしばしばでした。IOC 本部はスイスのローザンヌにあります。お昼の飛行機で東京を発つと、その日の夕方に向こうに到着します。ホテルに宿泊し、翌日は終日会議。終わるとすぐパリに出て夜行便に乗り、翌日日本に帰着。こういう旅程はかなり体力を使うんですよ。

── 本当に体力がないと務まりませんね。

IOC委員という立場

── 一般の方にはわかりづらいと思うので、IOC 委員と NOC（各国国内オリンピック委員会）との関係について教えていただけますか。

アテネ大会で谷亮子選手に
金メダルを授与する（2004 年）

IOC 委員というのは、自国の利益を代表しているわけではありません。IOC を代表して日本にいる。いわば IOC から日本に派遣されている大使のような立場といえばわかりやすいでしょうか。帽子を二つ持っていて、あるときは IOC の帽子を被り、あるときは JOC の帽子を被ることもある。私の前任者の竹田さんや清川正二さんの時代は、政治とスポーツの狭間で非常に苦しい立場に置かれた時期があったのですよ。

── 1980年のモスクワオリンピックのボイコットのときなどですね。

そうです。竹田さんや清川さんは、オリンピック運動は政治の影響を受けてはいけないと、なんとしてもモスクワに日本代表選手団を送り出したかった。しかし政府の指示との板挟みで大変苦しい思いをされました。幸い、私の時代にはそういうことはなかったので助かりました。

2020年オリンピック招致、現状では東京有利か

IOC 評価委員リーディ氏（中央。2020 年開催都市評価委員会では委員長を務める）を出迎える。右は河野一郎氏（現日本スポーツ振興センター理事長）（2009 年）

── それでは、2020年の東京オリンピック招致について伺います。石原慎太郎東京都知事の辞職もありましたが、状況はいかがだとお考えですか。

仮に明日投票があれば東京は勝てると思います。といいますのは、各候補都市の現況を見ますと、スペインの開催は経済事情を勘案すると難しいところに来ています。イスタンブールは隣国シリアとの問題がありますし、大きな国際大会の開催経験がなく、組織力の度合いも不透明です。今なら東京有利だとは思いますが、投票は来年9月7日です。その間に何が起こるかわかりません。ですから現時点でできるだけのことはすべてやり、その日に備えるしかないと思いますね。

── 「できるだけのこと」と言いますと？

一つは、低いとされている支持率についてです。他都市に少しでも追いつけるよう努力しなければなりません。次に、原発事故の影響です。「東京は問題ない」ということを強く印象づけなければなりません。私はヨーロッパで、「フクシマは東京のどのへんにあるのか？」という質問をよく受けるのです。ですから、その後の推移を正しく伝え、「心配ない」ということを発信する努力をすべきでしょう。

── IOC 評価委員会は来年3月に来ることになっていますね。

あの委員会は、私が 20年ほど前に立ち上げたのですよ。

── そうだったのですか。

評価委員会に対しては、東京開催についての自信を示すことが重要ですね。

オリンピック招致とは、世界平和へ寄与するステージの提供

── 日本のようにマスコミが発達している国だと、「賛否両論こそがマスコミの本道」というところがあ

ります。海外のマスコミと異なり、一つの意見を主張するのではなく、ミスなくバランスを取ることも重視されるため、思い切った意見を言えない事情があります。

メディアの大先輩、西田さんがおっしゃるのですから、全くそのとおりでしょう。実は私もそう感じていましたので、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会には、メディアと密接な関係を持つようにとアドバイスしています。

コペンハーゲンのIOC総会における
2016東京プレゼンテーション（2009年）

メディアの方は、オピニオンリーダーです。ですから経済面のメリットだけを取り上げたり、センセーショナルな事柄ばかり追うのではなく、オリンピック招致とは「世界の平和運動を演出するステージの提供」なのだということをしっかり気に留めて、そういう記事を書いていただけたらと思っています。

残念ながら、そういう視点はあまり見られないですね。

オリンピックの本質というのは、オリンピック大会よりも「オリンピック運動（オリンピック・ムーブメント）」にあるのですね。オリンピック大会は、そのオリンピック運動の目的を達するための有効な手段の一つなのです。

猪谷さんは、長い間、NPO法人日本オリンピックアカデミー（JOA）の会長として、オリンピック・ムーブメントの普及・啓発に取り組んでこられ、そのお立場からの発言もされていますね。

はい。1964年の東京オリンピックのころは、参加NOCは93の国と地域でしたが、2012年ロンドン大会では国と地域の数は204と倍以上に増えています。日頃鍛えたスポーツの技を競いながら、お互いをより深く理解し友情の輪を広げるステージがそれだけ広がっているということは、世界平和への寄与もそれだけ大きいということなのですね。
オリンピック運動というものをぜひメディアの皆さんにも正しく理解していただき、より良い社会を構築するツールとしていただけたら最高だなと思いますね。

もっと若者たちの体力づくりを

昨年、スポーツ基本法が公布・施行され、スポーツ界はずいぶん刺激を受け、活気づいた面があります。これについてはどうご覧になっていますか。

遅きに失した感はあります。もっと早くできてほしかった。これを機に、スポーツ庁なりスポーツ省を政府がつくり、日本の選手たちが海外のスポーツ先進国の選手たちと互角に戦えるようなスポーツの環境づくりに結びついてくれればいいと願っています。それとお金が全てではないのですが、現状、助成金が非常に少ない。またJOCなどが資金をつくるとそれには税金をかけられてしまう。助成金を増額するか、集めてきた資金は税金を免除するか、どちらかにしてほしいと思います。

JOCオリンピック
フェスティバルでの挨拶（2008年）

スポーツの在り方を見直す契機にしてほしいものですね。

ええ、ロンドン大会を見てもわかるとおり、日本選手がオリンピックや世界選手権で活躍すると、日本のスポーツ熱をあおります。そして、それは生涯スポーツの振興にもつながるのです。現代の若者は非常に体力が低下している。

日本オリンピックアカデミー（JOA）主催のオリンピック教室（2012年）

これは私が一番憂慮していることです。スポーツ選手に限らず、政治家もビジネスマンも芸術家も体力がなければ満足な仕事はできません。子どもをどんなに頭脳明晰に育てても、それを支える体力がなければ頭脳は役立たないのです。寝たきり老人の増加も問題になっています。介護も大切ですが、若いうちに体力をつけておくという根本的な取り組みも忘れてはなりません。

── スポーツ選手だけではなくて、もう国民すべてが「あまねく」スポーツを、ということが大事なのですね。

ソチ冬季オリンピックの日本人スキーヤーに期待

── アルペンスキーヤーとして、スキー界への提言は何かございますか。

トリノ大会回転であとわずかでメダルを逃した
皆川賢太郎（2006年）

私は今年8月から東京都スキー連盟の会長になりましたので、またスキーを始めたところです。ピークのとき(1993年)にはのべ1860万人もいた日本のスキー人口は現在はのべ570万人に減少しているそうです。私が銀メダルを取ったとき、300万人ほどのスキー人口はあっという間に倍増したと聞いています。ですから、2014年のソチ冬季オリンピックではアルペン選手に大活躍をしてもらい、スキー人口の増加に貢献してもらえるとうれしいと思っています。

── 競技スポーツで好成績を挙げると、それが生涯スポーツの推進にもつながるということですね。

そうです。競技スポーツと生涯スポーツは、車の両輪ですからね。

セカンドキャリアを見据え早い時期から勉強にも取り組む

── スポーツ基本法の中には、「アスリートのセカンドキャリア」についての項目もあります。猪谷さんは、スポーツ界でもビジネス界でも成功をおさめていらっしゃいますが、どのような政策を打ち立てて推し進めればよいと思われますか。

これは後押しもさることながら、まず本人の自覚でしょう。勝利のためには頭脳が必要です。それには勉強が一番のトレーニングです。それを自覚して取り組むことです。

── 文武両道ですね。

選手をリタイアしてからでは遅いのです。スポーツをやりながら、セカンドキャリアを見据えた活動もしていく。そのためには、ビジネス界にはインターンシップなどで協力してほしい。選手生活をおくっていると、同級生よりも7～8年遅れてしまうわけです。それをハンディとせずに、有用な人材として重宝がられるように選手たちを育てていけば、企業側も喜んで採用してくれるようになるのではないでしょうか。

── 猪谷さんの歩んでこられた道をお話しいただいて私は感動しています。あらためて、最後に一言、何かございますか。

オリンピックには3つの原則があるといわれます。エクセレンス（excellence）、卓越と訳せばいいでしょうか。二つ目はフレンドシップ（friendship）、友情ですね。三つ目がリスペクト（respect）、尊厳です。スポーツをすることで、若者にこれらを体得してもらいたい。そうすればきっと、尊敬される社会人として認められ、活躍できることでしょう。

日本体育大学から名誉博士号を授与される（右は谷釜学長）（2011年）

スキーの歴史

1922 大正11
大日本体育協会内（日本体育協会の前進）にスキー部が設けられる

1923 大正12
第1回全日本スキー選手権大会が北海道・小樽近郊の緑が丘で開催

1925 大正14
全日本スキー連盟（SAJ）創立
初代会長に稲田昌植男爵就任

1926 大正15
全日本スキー連盟が
国際スキー連盟（FIS）に加盟

1928 昭和3
第２回冬季五輪大会（スイス・サンモリッツ）に初めて選手派遣

1929 昭和4
全日本スキー選手権大会に複合競技が新採用

1931 昭和6
第1回のスキー講習会が文部省の主催で開催（長野県・野沢温泉村）

1931 猪谷千春氏、北海道に生まれる

1932 昭和7
第３回冬季五輪（アメリカ・レークプラシッド）でジャンプの安達五郎が日本人選手初のひと桁となる８位の健闘

1937 昭和12
第1回のアルペン全日本選手権大会が滋賀県の伊吹山で開催

第５回冬季五輪の開催地が札幌市に決定

1938 昭和13
第５回冬季五輪札幌大会は日支事変勃発により開催返上

1941 昭和16
全日本スキー連盟、財団法人の認可を受ける（厚生大臣認可）

1942 昭和17
第二次世界大戦勃発のため全日本スキー連盟解散、(財)大日本体育会スキー部となる

1945 昭和20
全日本スキー連盟が復活

1945 第二次世界大戦が終戦

1947 日本国憲法が施行

1948 昭和23
戦後初の第３回国民体育大会（冬季）兼全日本スキー選手権大会、長野県野沢温泉スキー場で開催

1950 朝鮮戦争が勃発

1951 昭和26
全日本スキー連盟、国際スキー連盟に復帰

1951 安全保障条約を締結

1952 猪谷千春氏、オスロ冬季五輪に出場

1955 日本の高度経済成長の開始

1956 猪谷千春氏、コルチナダンペッツォ冬季五輪で日本の冬季五輪初となる銀メダル獲得

1959 猪谷千春氏、AIU保険会社入社。日本支社長、AIU日本法人の会長などを経て現在名誉会長

1960 猪谷千春氏、スコーバレー冬季五輪に出場

1961 昭和36
第1回スキー大学、志賀高原で開催

1962 昭和37
第６回インタースキー（イタリア・モンテボンドーネ）開催、日本から代表４名派遣

1964 東海道新幹線が開業

1966 昭和41
第11回冬季五輪、札幌市に決定

1967 昭和42
丸山仁也、全日本スキー選手権大会で男子初のアルペン３冠王

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1972 昭和47
札幌五輪開催。70m 級ジャンプで日本、メダル独占の快挙

金メダル 笠谷幸生、銀メダル 金野昭次
銅メダル 青地清二

1973 昭和48
全日本スキー連盟、財団法人の認可を受ける（文部大臣認可）

1973 オイルショックが始まる

1975 昭和50
第11回インタースキーの日本開催が決定（1979年・蔵王）

1976 ロッキード事件が表面化

1978 日中平和友好条約を調印

1980 昭和55
レークプラシッド五輪 70m 級ジャンプで八木弘和が銀メダル獲得

1981 昭和56
第1回全日本フリースタイル選手権大会開催（志賀高原・サンバレースキー場）

1982 猪谷千春氏、国際オリンピック委員会（IOC）委員に就任

1982 東北、上越新幹線が開業

1984 香港が中国に返還される

1986 昭和61
第1回冬季アジア大会、札幌市で開催

1988 昭和63
アルペン・ワールドカップ（ノルウェー・オプタル）で岡部哲也が日本選手初の表彰台となる2位入賞

1989 平成1
アルペン世界選手権大会（アメリカ・ベイル）で川端絵美が日本女子選手初の滑降５位入賞

1991 平成3
1998年冬季五輪（第18回）の開催地、長野に決定

1992 平成4
アルベールビル五輪でノルディックコンバインド団体、初の金メダル獲得（三ヶ田礼一、河野孝典、荻原健司）

1993 平成5
アルペンワールドカップで女子の川端絵美が、サンアントンで行われた滑降で３位入賞（女子選手初、滑降は男女通じて初）

ノルディック世界選手権大会（スウェーデン）のノルディックコンバインド団体が金メダル獲得（阿部雅司、荻原健司、河野孝典）

ノルディックコンバインドの荻原健司が、日本初のワールドカップ総合優勝を飾る

1993 猪谷千春氏、日本オリンピックアカデミー会長に就任

1994 平成6
リハンメル・オリンピックでノルディックコンバインド団体が２大会連続金メダル獲得

ノルディックコンバインドの荻原健司が、ワールドカップＶ２達成

1995 平成7
ノルディック世界選手権大会（カナダ・サンダーベイ）のジャンプ・ノーマルヒルで岡部孝信、斉藤浩哉が金・銀メダル獲得

荻原健司、ワールドカップ V3 達成

1995 阪神・淡路大震災が発生

1997 平成9
初のフリースタイル世界選手権大会、長野県・飯綱高原で開催

1998 平成10
長野五輪開催。日本はジャンプ団体、ラージヒル、フリースタイル女子モーグルで初の金メダル３個獲得

岡部孝信・斉藤浩哉・原田雅彦・船木和喜（ジャンプ団体）、船木和喜（ラージヒル）
里谷多英（フリースタイル女子モーグル）

1999 平成11
ノルディック世界選手権大会（オーストリア・ラムソウ）のジャンプ・ノーマルヒルで札幌五輪来２度目のメダル独占

金メダル 船木和喜、銀メダル 宮平秀治
銅メダル 原田雅彦

2000 平成12
日本、オーストリアスキー連盟と協力協定締結

2002 平成14
ソルトレークシティー五輪でモーグルの里谷多英、2大会連続となるメダル獲得（銅メダル）

五輪および世界選手権大会金メダリスト、ワールドカップ通算19勝、総合優勝3回の荻原健司が引退

2003 平成15
1月12日を「スキーの日」に制定

2005 猪谷千春氏、IOC理事を2期（1987〜1991、1996〜2000）経験後、副会長に就任

2006 平成18
トリノ五輪アルペンで、50年ぶりの入賞果たす（皆川賢太郎４位・湯淺直樹７位）同五輪で日本の五輪史上初の出場全チーム入賞の快挙（６チーム）

2007 平成19
アジア初のノルディック世界選手権、札幌市で開催

クロスカントリーの夏見円が同競技の女子初となる５位入賞（スプリント）

2008 平成20
クロスカントリー・スプリントの夏見円、ワールドカップ（スウェーデン・ストックホルム）で同競技初の表彰台（３位）

2008 リーマンショックが起こる

上村愛子、フリースタイル・モーグル史上初のワールドカップ総合優勝を果たす

2009 平成21
世界選手権で五輪、世界選手権を通じて過去最高となる４個の金メダル獲得

2011 猪谷千春氏、日本体育大学より、名誉博士号を授与される

2011 猪谷千春氏、IOC名誉委員に就任

2012 猪谷千春氏、東京都スキー連盟会長に就任

フォトギャラリー

4歳の頃（1935）

乗鞍の小屋にある一本杉（1940）

鈴蘭でのスラローム大会で8歳で入賞（1940）

浅虫ゲレンデを滑る（1944）

小屋の庭でシャドー・クリスチャニア（1948）

小屋の屋根を滑る（1951）

志賀高原での猪谷一家。左から母・サダ、千春、父・六合雄（1952年）

オスロ大会回転で11位の結果を収める（1952）

富士山七合目を滑る（右から2人目、1952）

恩人スター氏（右）と志賀のコースを見て回る（1954）

渡米の際に見送りを受ける（1954）

ダートマス大学の卒業式に臨む母・サダ（左）等と

コルチナ・ダンペッツォ大会回転のスタート風景（1956）

コルチナ・ダンペッツォ大会回転で銀メダルを獲得（1956）

アルペン三冠王に輝いたトニー・ザイラー（1956）

AIU保険社長時代

メキシコIOC総会後の竹田恒徳IOC委員（左）
中央は東龍太郎IOC委員（1968）

来日したサマランチIOC会長（当時）と（1987）

フォトギャラリー

ソウルで開催されたIOC総会で演壇に立つ（1992）

アンゲロプロス・アテネ大会組織委会長（右から2人目）等と（2004）

アテネ大会で谷亮子選手に金メダルを授与する（2004）

IOC副会長就任祝賀パーティにて（左は荻原健司氏）（2005）

IOC副会長就任祝賀パーティにて竹田JOC会長と握手（2005）

トリノ大会回転であとわずかでメダルを逃した皆川賢太郎（2006）

長野オリンピック10周年記念で来日したIOC委員等と。（前列左端）（2008）

JOCオリンピックフェスティバルでの挨拶（2008）

IOC評価委員リーディ氏（中央）を出迎える。右は河野一郎氏（現日本スポーツ振興センター理事長）（2009）

コペンハーゲンIOC総会での2016東京プレゼンテーション（2009）

コペンハーゲンIOC総会時のポートレート（2009）

バンクーバーで開催されたJOCレセプションで、竹田JOC会長夫妻（左）、ヘーシンク氏（左から5人目）、岡野俊一郎氏（右から5人目）等と（2010）

日本体育大学から名誉博士号を授与される（右は谷釜学長）（2011）

日本オリンピックアカデミー（JOA）主催のオリンピック教室（2012）

日本のオリンピック参加100年記念式典での挨拶（2012）